五色沼の色の神秘

Ｔ・ＫＡ

ぼくは、一日目、半日コース、Ｂグループで、実際に五色沼の自然探索路を歩きいろんな五色沼の姿を見てきました。でも一日目の、半日コースでは、天気がはれたり、曇ったり、雨が降ったりして天候が悪くなって、本来の五色沼を見ることができませんでした。でも、少しだけ晴れている時があってそのときは、少しだけ本来の五色沼を見ることができてうれしかったです。これでわかったことは、五色沼は本当に天候に左右されやすく少しでも雨が降ったり、曇ったりしただけだと、本来の五色沼を見ることができないということが分かり、本来の五色沼を見るときは晴天じゃないとだめなんだと思いました。

物体の色

これから物体の色について説明します。
表面色:物体の表面で反射した光によって、色づきます。全ての波長の光を反射するとその物体は「白」見えます。すべての光を吸収するとその物体は「黒」見えます。
選択吸収:色ガラスやインクの色は、光が物質中を透過するときの特定の光が吸収され、その余色に見えます。絵の具のような不透明体の色は、当たった光が内部で、選択吸収を受け吸収されないで、反射して出てくる光の色に見えます。
光の散乱による色:太陽光線が大気中を進んでいるとき、波長が長い赤や黄色の光は直進しますが波長の短い青や紫の光は、大気中で散乱されます。このため、夕日は赤く見え空は青く見えます。
磐梯高原の湖沼群:明治の噴火による岩なだれ出てきた、磐梯高原には、大小さまざまな湖沼がある。五色沼遊歩道には、美が市から。昆沙門沼、赤沼、深泥沼、辰沼、弁天沼、青沼、瑠璃沼、柳沼、母沼、父沼、がある。これらの沼は、地下水や古川でつながっているが、沼ごとに大きく性質が異なりさまざまな色の水がたまっている。五色沼遊歩道からは、外れるが遊歩道の南側の裏磐梯スキー場に向かう途中に弥生沼、緑沼などがあり、噴火口底には、銅沼があり、その東側には、レンゲ沼これらの湖沼はそれぞれの沼特有の植物も多く、水の色も様々で、四季を通して楽しめる。

五色沼湖沼群の水生植物、五色沼湖沼群に見られる主な、水生手植物は、次のようなものである。

この二つの写真は昆沙門沼で上が、曇っているときの昆沙門沼で、下が、

晴れているときの昆沙門沼です。この二つを比べると一目で見てわかることは、曇っているときと晴れているときの昆沙門沼の表面色はすごく違います。

五色沼湖沼郡では、最大の沼で青白色の水をたたえ東側から、井戸沼などの四部分からなる。岸辺にはヨシが、茂りオヒルムシロとフサモが広い面積に見られる。沼の中央にある姫島の南方には、ヒメガマがみられている。

赤沼:噴火口にある銅沼に近い水質で、鉄やマンガンイオンが大量に含まれる水質である。ヨシの根元には、水酸化鉄などのオレンジ色がヨシに付着しており、ヨシの葉の緑色と黄緑色の沼の水と対照的に目立つ存在で、沼の名所「赤沼」の期限となっている。

深泥沼

この沼は、三つの部分から、なる沼で、それぞれの沼が地下からの湧水などの影響で水質が違い、水の色や生育植物にも違いがある。吉垣氏から、10m ほど沖に向かって侵入して、陸地化が進んでおり、水面は、沼全体の１３%ほどしか開いていない。

竜沼:この沼は遊歩道から、少し北側に外れているため、あまり注目されないが、水深が１０m あり湖水が大きく循境し、水温成層が出来ず冬期間凍結しない生物相は詳しく調査されており、多くのプランクトンや底生生物の生息が知られている。

弁天沼:

最大深度 7m の三星の水をたたえる大きな沼で、沼の周りには、ヨシが繁茂し陸化が進んでおり、湖底には、う噛み釜後家のマットが広がる場所もある。魚の生息はない。

青沼;

酸性のきれいな青い水をたたえた小さい沼名である。岸にはヨシ群落や柳群落があるが、その先の湖底をよく見るとウカミカマゴケヤホソバスギゴゲの大群落が繁茂し、その塊は見事である。

るり沼:透明度 21 という記録がある極めて、澄んだ青い水をたたえる沼で、水深が 9m なので、そこまで透き通ってよく見える。

五色沼遊歩道の周りの林

現在の遊歩道は、裏磐梯一帯の植林に貢献した遠藤現夢が作った植林のために作業道をりようしている。遊歩道の所々には、当時の石垣の跡が残されている。遠藤現夢のほかに裏磐梯の植林に挑戦した人に、白井徳次、矢部長吉がいるがいずれも全財産を使い果たしたし、失敗した。遠藤現夢は、林学博士の中村弥六の指導を受け岩なだれ跡の荒れ地に、赤

松を植林し裏磐梯の緑化にせいこうした。